

総力戦体制下における徴用工の意識動向

——竹鼻信二『徴用日記』の分析——

佐々木 啓

はじめに

(1) 問題意識

本稿の目的とするところは、総力戦体制下の日本において国民徴

用令によって動員された民衆の意識動向について、その一端を明らかにすることにある。

国民徴用制度については、従来の研究では主として制度そのものの不合理性や民衆生活への抑圧性が強調され⁽¹⁾たが、こうしたとらえ方に対して筆者は、同制度が単に抑圧と強制によって遂行されたのではなく、民衆生活の窮乏化や民衆の動向に規定されながら再編を余儀なくされていったことを明らかにしてきた。徴用制度は、各種社会政策の実行など、民衆の「同意」調達という側面も含み込みながら展開したのであり、單なる強制力の觀点ではとらえきれない内容を持っていたのだと考えられる。したがって、こうした徴用

制度の展開過程の全体像をつかんでいくためには、その方向性に影響を与えた民衆の意識動向をふまえることが肝要である。本稿では、「聖戦」を文持し、勝利を願つて生産現場で働きつづけた一人の徴用工の日記を分析することで、この課題に迫りたい。

戦時下の徴用工については、これまでの研究において、その劣悪な待遇に対する不満や、欠勤、サボタージュ、逃亡者の増大など「自然発生的な抵抗」がクローズアップされ、「民衆の自然発生的な厭戦感情をもつとも先鋭な形で表現した」と評価されてきた。⁽²⁾徴用工の厭戦感情が相対的に強かったこと、ないし生産秩序からの逸脱がより広範に認められたことは間違いないところだと筆者も考へている。しかし、これらの研究には主として官憲の、しかも「治安」に関する史料に依拠して書かれているがゆえの限界があることは否めない。すなわち、これらの史料は常に官憲の“治安”対象となる徴用工の意識動向を中心に叙述されており、その対象からはずれている圧倒的多数の徴用工の動向が後景に退いているとい

う限界がある。また、民衆の意識動向のある部分を切り取って示しているがゆえに、具体的にどのような論理で民衆が徴用制度を認識し、どのような論理でこれのあり方を批判したのか、その動態をどうらえることが困難だという問題がある。

こうした研究と史料の状況をふまえ、本稿では一人の徴用工の日記に光を当て、その徴用生活の実態と意識動向を明らかにすることをめざす。もちろん一人の徴用工を中心に論じる以上、普遍性の点での限界はあるであろう。しかし、一人の人物の意識動向を個別具体的に明らかにしていく作業は、官憲史料中心の描写とは異なり、ある志向性の展開の経過を継続的に見ていくことを可能にする。本稿では、こうして現れる意識のダイナミズムを当該社会の実態の中に位置づけ、徴用制度の構造、ひいては戦時期の国民統合の実像を把握するための一つの視座を提示したい。

(2) 竹鼻信三『徴用日記』について

本稿で使用する『徴用日記』は、一九四三年一月に大阪陸軍造兵廠に徴用された和装品製造卸会社の従業員・竹鼻信三が、四三年六月から四五年九月にかけて記した日記を集めたものである。

竹鼻は、戦後「裸一貫」から和装品製造卸会社（タケハナ株式会社）を設立し、成功をおさめた「立志伝中の人物」といわれている。⁽³⁾一四年、京都市の木綿屋の勤め人の家に七男四女の九番目、五男として生まれた竹鼻は、尋常小学校、商業実習学校を卒業後、京都に

本店を持つ加藤伍商店に勤めた。勤め先には、経営者をはじめクリスチャンが多くおり、自然とキリスト教に近づいた竹鼻は、三二二年に洗礼を受け、以後信者として人生を歩んだ。その後四一年には結婚し、四二年には長女も生まれているが、四三年一月に大阪陸軍造兵廠に徴用され、以後敗戦に至るまで事務職として勤務することとなつた。

陸軍の造兵廠に勤員されたことと、生産現場ではなく事務職として勤いたことは、竹鼻の徴用生活の大きな特徴である。三九年から四三年八月の間に徴用された新規徴用工のうち、海軍に勤員された者が四五・八%、民間工場へのそれが四五・三%であったのに対し、陸軍工場に徴用された者はわずか八・九%であった。⁽⁴⁾民間軍需工場への徴用が「資本の論理」という別の問題をはらんでいたことやその労務管理の劣悪さが問題とされていたこと⁽⁵⁾、また、事務職と異なる現場の肉体労働が常に危険と隣り合わせだったことを考へるなら、竹鼻の環境は相対的に「恵まれた」ものだったといえるであろう。もっとも、「平和産業」の従業員から徴用工となつたことや、當時最大の軍需産業都市の一つである大阪で生産労働に従事したことは、当該期においては多くの人びとが経験したことであり、その意味では竹鼻の経験もある種の一般性を有しているといえる。また、筆生という職員層の最下位に位置し、廠全体の動向をつかみやすい立場にあつたことも、竹鼻の日記を考える上では重要な要素だといえよう。

日記は、勤務中の空き時間を利用して陸軍の用箋や一般の原稿用紙などに書き記された。兵器生産という軍事機密に関わる仕事である以上、防諜の取締や退出時の持ち物検査なども当然あったが、竹鼻は「自分の生活を反省し、思うところ、その時々の考へを記しておくのも又何かの為」（四三・一一・一二⁽³⁾）と思い、退廠時には「細かく折り畳んでズボンベルトの中に挟んで」持つて帰るなど、工夫しながら書きつけた。戦時中は日記原稿は自宅の各所にバラバラに保管されていたが、戦後自身の手によって一つの簿冊（原本）にまとめられ、「徵用日記」と名づけて保管された。八三年、大阪砲兵工廠研究者の久保在久氏による資料提供の呼びかけに竹鼻が応じることによってこの日記の存在が広く知られるようになり、「当時の大阪造兵廠の模様を伝える貴重な資料」として脚光をあびることになった⁽⁴⁾。八七年には竹鼻自身の編集で『徵用日記——戦前戦後の思い出』として自費出版されている。現在、一部を除いて原本のコピーが大阪国際平和センター（ピースおおさか）に所蔵されており、本稿執筆に当たってはこれを参照した。

『徵用日記』には、四三年六月二一日から四五年九月九日まで、

合計三〇八日分の日記が綴られている（「刊行版」には九月九日以降のも含め、三一一日分掲載）ほか、自作の短歌や詩、新聞の切り抜きなどが収められている。四三年、四四年の年末には、それぞれ一年間をふりかえっての感想も書かれており、（ピースおおさか所蔵のコピーには一部分しか収められていなかったが）自らの半生を

ふり返る文章や、加藤伍商店勤務時代の思い出をつづった文章なども原本には収められているようである。日記の内容は、日々の出来事を細やかに記しつつも、自らの生活態度や世界観を内省的に捉えるものが多く、西川祐子氏の「一分法」を使うならば、「出来事の日記」というよりは、「内面の日記」に近いものといえるであろう。徵用工の日記でこのように詳細な内容を持ったものは希有であり、これだけの日数の記述が残されているものもめずらしい。その意味で、『徵用日記』は徵用工の意識動向をとらえる上で大変貴重な史料ということができよう。

なお、本稿では主として竹鼻という一人の徵用工の生活実態と意識動向を扱うが、廠内での経験はともかくとして、廠外での経験は「銃後」の大坂市民の多くの経験とかなりの程度重なる部分があると思われる。しかしここでは、そうした竹鼻の経験が「産業戦士」という自らの立場に基づく形で受けとめられている点が重要である。食糧不足にしても空襲にしても、それは単に都市民としての経験ではなく、徵用工竹鼻としての経験として読まれる必要があるであろう。

以下では、このような『徵用日記』をもとに、戦時下的大阪陸軍造兵廠における一人の徵用工の意識動向をとらえ、その全体のなかでの位置づけをはかるとともに、総力戦体制下の民衆意識の特質に迫ってみたいと思う。

一 徴用の衝撃

下宿暮らしとなり、やがて森小路に家族を呼んで居を構えた。新居では蚤に悩まされたりもしたが、「健康本位」の良い住居だと竹鼻は感じていた（四三・六・二二）。

竹鼻が第五期の徵用工として大阪陸軍造兵廠に入ったのは、一九四三年一月のことであった。同廠は、日中戦争の段階で全陸軍工廠の二六%の生産高を上げるなど⁽¹³⁾、軍需生産の要の位置にあった。しかししながら、戦争の長期化のなかで、生産の基幹を担っていた工員の応召が相次ぎ、徵用工をはじめとした新規労働者の占める割合が多くなるなど、同廠の生産現場は混乱のなかに置かれることになる。四一年一〇月以降たびたび動員されてきた徵用工も、敗戦時には工員總数六万三九四二人中六五五八名を占めるほどになり、朝鮮人徵用工や女子挺身隊、学徒なども含めれば、被動員労働者は全体の約三分の一の割合を占めるまでに至った⁽¹⁴⁾。

こうした過程のなかで徵用されてきた竹鼻に与えられた仕事は、試製兵器製造班（新兵器の開発・生産にたずさわる班）の筆生（事務職）であった。四四年一月の資料によれば被徵用者のうち八六%が直接生産に従事させられており、竹鼻のように事務職につく徵用工は少数であったといえる。⁽¹⁵⁾なぜ竹鼻が生産現場に回されなかつたのかについては定かではないが、竹鼻自身が身体が丈夫な方ではないと自己規定していることや、「兵役免除となり、戦局下、第一線に役立てぬ肩身のせま」（四三・一二・一二）さを感じていたことなどと何らかの関係があると思われる。住居としては、単身赴任の

竹鼻にとって、徵用そのものは名誉なこととして受けとめられたが、他方でそれにもなう収入減や仕事の張り合いのなさは、大きな失望を感じるものに他ならなかった。日記を書きはじめるのは徵用から約五ヶ月後の四三年六月二一日のことだが、四三年の日記について、全体的にこうした収入の問題と労働環境の問題に対する言及に多くのスペースが割かれている。以下では、この二つの問題

を中心に、四三年末頃までの竹鼻の記述を検討していくことにした
い。

(1) 収入減という問題

竹鼻にとって大きかった徴用とともになう衝撃の一つは、収入の大
幅な減少であった。竹鼻は、徴用工になって以来月収にして一〇〇
円前後の収入（日給二円七八銭〔四三・九・一一〕）と、七月には
九七円（四三・七・一）、年末には一六一円の賞与を得た（四三・
一一・一八）ほか、国民徴用援護事業の一貫として行われている補
給金（前収との差が著しい場合に支払われる）⁽¹⁷⁾と、徴用前の勤め先
である呉服問屋から送られる補給金を得ていた。家賃に充てられる
ぐらいの額になる前者の補給金の存在は特に大きかったようで、竹
鼻は「我々徴用者に対する政府の恵みに感謝」（四三・九・一六）
と記している。しかし、これらの収入は一〇〇〇円、一五〇〇円の
賞与が当たり前のように与えられていた加藤伍商店時代の収入（四
三・七・三）に比べれば比較にならないほど少ないものであり、ま
た、四三年三月の警視庁の調査で労務者の平均月収が二〇八円四〇
銭だったことに鑑みれば、相対的にも多いとはいえないものであっ
た。戦時経済の悪化のなかで生計費が年々高騰していたことも考慮
に入れるなら、収入減の影響は相当なものであったと考えられる。

したがって、当然家計のやりくりに困る月も出てくる。「二十八

円の家賃が家計の赤字の重大問題」（四三・一一・一）になること

もあり、国家からの補給金が減少すれば、これ以上切りつめること
は難しいと悩むこともあった（四三・一一・四）。しかし、「こうし
た苦しい家計状況に対しても竹鼻は、「今は給与の問題でない。名譽
ある徴用工員として働くことだ」（四三・七・三）ととらえ、「健康
で働きさへすればどうにか暮らして行けるのだ。これで御奉公出来
れば満足だ」（四三・一一・一）と記した。「金だけで買へない貴
いものを今の生活に知り、この生活が不足でもない。むしろ今の生
活に感謝したい」（四三・一一・六）といった形で、この状態が自
らの修養につながると考えるようにした。生活の苦しさや職場への
違和感を自身の経験としてプラスにとらえ、自らを律していく姿勢
はこの日記において頻繁に見られるものである。

しかし、その一方で、家族を持つ工員の給料は「普通世帯の水準
迄引上げてやるべき」であり、「工員の社会的地位も低く見なされた
過去をかへり見て、その名も産業戦士となつた今日、この点をよく
考へ百年の計をたつべきだ」（四三・六・一）といったように、
竹鼻は概して現在の「産業戦士」の賃金は低すぎるという認識も持つ
ていた。現状では兵器生産という国家的に重要な任務を担う人間に
正当な評価が与えられているとはいえない、というのも竹鼻の収入
にまつわる認識の一つの側面であった。

(2) 労働環境の問題

このように賃金の低さについて、自らの修養につながると考える

ことで自「」を律した竹鼻であったが、他方の労働環境の問題については、かなり頻繁に動搖する気持ちや不満をつづっている。竹鼻にとって「決戦」下の大坂陸軍造兵廠で「産業戦士の一員として、特に名譽ある徴用工員として働くこと」は誇りであって、「男子として仕事に対して不足はな」かったのだが、実際の生産現場は、そうした「名譽」とはあまりにもほど遠いものだと感じられたのである（四三・六・一一）。すなわち、「一、三日来仕事なく、遊んで過す」（四三・七・五）、あるいは「遂に今日一日仕事は何もなく残業に入る」（四三・七・九）といったように、造兵廠における仕事量は竹鼻の目にはあまりにも少なく映った。このような生産現場のあたり方は、ずっと「商人」の世界で生きてきた竹鼻にとって、我慢のならないことであった。四三年一〇月二七日の日記で竹鼻は以下のよう述べている（〔〕は引用者による）。

毎日これと云つた計画もなければ、追廻されること「も」なく、自然の間に人間が阿呆ぼけした者になり、この生活が普通となり、ちょっとでも遊ぶ様「に」なり一日仕事することが損の様に感じたりする。こんな無氣力な仕事、いやになる。これが官吏だそうだ。あの一時間も惜しく働いた昔の商売の方がずっと面白い。〔中略〕これからこの生活が続くと思ふと、なんとかこの生活の中に光を求め、経済の事より仕事に気力を求めたい。経済の点は考へても工員としてこれ以上望んだ所で駄目であり、十分腕をふるへる仕事が欲しい。三十働き盛りの男一匹、腕が

夜泣きする。徴用せられて折角來てもこれでは、働き甲斐がない。

このように、竹鼻にとって大阪陸軍造兵廠の労働環境は、何よりも「商人」の世界との落差という観点からとらえられた。一時間で働いているため働く気力も起こらない造兵廠の世界とでは、その労働に対する考え方があまりにも異なっていた。⁽²³⁾「働き甲斐と云つた点に於て、この陸軍造兵廠に於ける仕事は比較にならぬ国家的にも高い仕事」なのは認めるものの、「勤労精神が低く、國家意識の問題にならぬこと」に失望したのであった（四三・一〇・二九、以下同）。竹鼻は、「物資の節約」、「能率の二倍」といった部屋ごとに掲げられている「所長方針」に対し、この職場は「自分の知つた範囲では最も非能率な、物資の乱用する社会」と皮肉をこめて記し、「國のため、時局を考えて眞面目に見る時、正視にたへない。指導者の罪か、制度の罪か」と嘆息している。このような現実を見るにつけ、竹鼻は「商人」時代の「あの働き甲斐のある、自分の手足を自由に活躍が出来、人格を認めてもらへる社会が恋し」くなるのであつた。

しかし、竹鼻は同じ日の日記で、自分の使命は「この「造兵廠の」社会を自分が入職した時より少しでも清め、高め、友を導き、よりよき理想になす様努力」することだと記しており、ここでもやはり問題を自らの勤務態度を律することに収斂させていく志向があった

ことも指摘しておく必要があろう。

なお、この時期軍需生産の現場が閑散とした状況になつてゐるのは、陸海軍の工場に限らず、民間でも同様であった。たとえば、四年一二月三日に開かれた通常大阪府会警察審査委員会では、「徴用工ヲ貰ヒマシテ、サウシテ其ノ中ニハ休ンデ居ツテモマダ人ガ剩ツテ居ル会社ガアルト云フコトヲ聞イテ居ル」、「現実ニ徴用サレテ居ツテ帰ツテ来タ人ノ話ヲ聞キマスルト、何ソニモ仕事ヲシナイデラム遊ンデ居ル会社ガアル」という府会議員からの発言があつた。⁽²¹⁾こうした状況は、東京都下の航空機工場にも見られ、またメディアでも問題視されており、当該社会において「暇な生産現場」⁽²²⁾はむしろ一般的な問題だったと思われる。その要因は、生産現場の裁量というよりは、日本資本主義の発達のあり方に規定された戦時経済全体の問題、特に物資の差配の不円滑によるところが大きかった。したがつて、竹鼻の生産現場に対する落胆や怒りの土壤は、日本の軍需生産体制そのものにあつたといえるであろう。

(3) 「衝撃」をどのように処理するのか

以上のように、徴用されてから約一年間の竹鼻の生活は、商人生活と工員生活とのギャップや、徴用工という「名譽」ある任務と現実の生産現場のあり方とのギャップに衝撃を受けつつ、それを自らの生活にとって意味のあるものととらえ、自己を律することを絶えず心がけようとするものだったといえる。徴用にともなう経済的な

不安や、生産現場の現状批判は、自らが「産業戦士」であることを基盤に展開され、それは時に「指導者」の批判へと結びつく鋭さを持つていた。他方で、そうした現状に対する不満は、自らの問題として内省的にとらえられる場合も多く、徴用によって受けた衝撃を「商人として井戸の中の蛙だつた」（「昭和十八年を送りて」）ことへの反省、あるいは人生にとって不可欠の経験として位置づけることで均衡がはかられていた。

こうした竹鼻の意識動向には、キリスト教信仰の影響が少なからずあつた。竹鼻は「信仰と云つて恥しい信仰であるが」としつつも、「自分が逆境に立つた時も自分をはげまし、力づけ」てくれるのが信仰であると感じており（四三・八・三〇）、自身にとって「人々損な立場にあるうと、又如何なる苦難、辛苦に会うとも、それに打勝つて希望にみちて、いつも感謝の中に、朗らかに、一日／＼を生きること」を可能にしてくれるものこそが、信仰だと考えていた（「昭和十八年を送りて」）。徴用によって以前のように礼拝には行けなくなり、また「敵性宗教」として批判されるなかで竹鼻は肩身の狭い思いをしていたが⁽²³⁾、そうした境遇のなかにあっても「今こそ信仰に依つて生くべき時だ！」（四四・六・八）と度々自身に言い聞かせているように、信仰への思いが消えることはなかつた。こうした信仰は、時に既存の秩序の枠からはみ出そうとする竹鼻の私的・経済的欲求や、生産現場に対する批判をある均衡のもとに置く機能を果たしたと見ることができよう。

他方で、今まさに決戦のさなかにあるのだという「決戦」意識が、日記の記述に大きな影響を与えていたことも指摘しておく必要がある。竹鼻の戦意は一貫して高く、生産現場に対する不満があつても、この戦争を勝ち抜くことへの意気込みはいささかも揺るがなかった。竹鼻は、インドの臨時政府樹立のニュースに、「英國にしばられた印度」に「待望の独立の好機が到来した」と喜び（四三・七・三）、今戦っている戦争が、「アジア五億の民解放の戦であり、アジアのアジア確立の戦であり、アジアにある不公平を正し、人種平等に、白毛人種にしばられて居た民族を解放」するための戦争であると信じて疑わなかった（四三・七・五）。このように、竹鼻においては常に国家の論理にのっとったかたちで戦争の意義が理解され、「我らは祭日も返上して増産にはげむ」「決戦〜、戦場は日曜も祭日もないのだ」といったように、「決戦」という文脈から自らの生活が照射された（四三・一〇・一六）。こうした意識のありようは、自らの私的・経済的欲求を抑えて耐え忍ぶことを要請し、労働のあり方を省みさせる効果を持つ一方で、生産現場の現状への不満を喚起し、現状批判への志向を強める効果を持つものであった。

二 行きづまる総力戦体制と批判意識の高まり

つづいて四三年末以降の日記の分析に移ろう。竹鼻が大阪陸軍造兵廠に徴用されてから約一年が経過した一九四三年後半から四四年

の日本は、いわゆる「根こそぎ動員」の段階に立ち至っており、国内の物資不足、食糧不足は日に日に深刻化していく状況にあった。軍需生産の現場から応召していく男子工員も多くなり、必然的に徴用工の位置づけが重要なものとなつていった。「根こそぎ動員」は、労働力の希釈化を進める一方で、從来下位に置かれた徴用工の地位を相対的に高める効果をもたらしたのである。

竹鼻自身も、四四年一月には「分担変更で、一年間、中途半端な遊んで居た様な仕事から、^(ハヤ)少さい乍ら一つの仕事の責任者として、自分の思う通り働く仕事が与へられる」ようになり（四四・一・二六）、四四年一月には筆生から事務員へと昇進した（四四・一・一〇日）。こうしたなかで仕事の高度化と多忙化が進み、竹鼻も以前のように仕事内容を嘆くことが少なくなつていった。このようないうな労働環境の変化や、戦局の深刻な状況を受けつつ、日記の記述も初期の頃と比べて変化していくことになる。

(1) 食糧不足と「遊興」問題

日記の内容のもともと大きな変化は、食糧不足についての言及が大幅に増えたことである。日本の民需生産は、四〇年の段階ですでに日中戦争開始の三七年水準を大きく割り込み、その後も繊維、食料品などを中心に、年ごとに下降していった。国民一人当たりの栄養摂取量も低下し、食糧不足は四四年にはすでに明白なものとなつていた。こうした状態の下で「闇」経済が広がり、都市から農村への

買出し、空き地を利用した野菜の自家栽培などが常態化するようになつた。

このような食糧不足の波は、都市大阪で軍需生産に従事する竹鼻の家庭にも直撃する。四三年一二月の段階では竹鼻家への主食米の配給は一日約五合であり、夫婦で晩、朝二食で食べてしまい、昼食分と長女の分が不足となる状況がつままれていた（四三・一二・一八）。当時の米穀配給基準量は、一人あたり一日一合三勺（一～五歳は八勺）とされており、その基準から見れば竹鼻家の配給も大きくなみ出るものではなかつたと思われるが、四二年一〇月以降挽き割りトウモロコシが混入されるようになるなど、その質的低下はすでに進行していた。⁽²⁵⁾これに対し竹鼻は、四三年秋頃から自家畑で野菜の栽培をはじめ、「素人百姓」によって食糧を補う一方、廠の給食を弁当に詰めて持ち帰り、長女に食べさせるなどして対応した。厳しい現実に、「男まで食事のことを気にする嫌な時代になつた」とも思つたが、「これも戦に勝つ迄の心棒」ととらえ、何とか乗り切ろうと心に決めた（同）。しかし、「田舎」に親戚のいない竹鼻は、「ほんとの配給だけと自由にとれるわづかの野菜で自給」せねばならぬ（四四・四・一三）、その苦労はたびたび日記のなかで吐露されている。自らの生活を切りつめ、「戦争に勝つ」という大目標のために自己を律していく姿勢は、敗戦に近づけば近づくほど貴くことが困難になつていった。

そういう生活意識は、やがて「不正」に対する激しい憎悪へとつになつていった。米軍がサイパンに上陸した四四年六月から、つい

ながっていくようになる。四三年末以降、『徵用日記』には「不正」な物資の配分に対する批判的な記述がしばしば見られるようになる。

炭燃料の不足にしても米の不足にしても、「國民はないものは忍ぶが一方にはそうした料理や、享樂方面に流れて居る事実は、不満の声を大きくさ」せている（四三・一二・一八）と、竹鼻はまず何よりも料亭や「享樂」の存在に対する疑問を強く持つていた。自らが「産業戦士」として増産のために働きながら窮乏生活に耐えている一方、いまだに料亭など「遊興方面」が存在しているのは竹鼻には許しがたいことであった。「國民に決戦生活を要求しつつ、一部こうしたことを今日尚許可して居ることの矛盾」（四四・二・二六）を感じ、全体の利益のために苦しみに耐えている「産業戦士」や「國民」の境遇と、それとはかけ離れた生活を送つている一部の「特權階級」の個人主義的な生活という対立軸がだんだんと竹鼻の意識の中に明確な形となつて現れていった。「国内のすべてが戦争に依る責任を均しく負うべきだ。一部の人びとが戦争に依つて富をつくり、戦時下あるまじき行為を許されて居る。これで良いのだろうか？」（四四・九・八）。こうした記述はその後もつづいていくことになる。

（2）空襲下の「指導者」批判

一方、四四年の半ば以降は、空襲関係の記述が多くを占めるようになつていった。米軍がサイパンに上陸した四四年六月から、つい

に竹鼻の住む地域でも防空警戒警報が発令されるようになる。六月一五日の最初の警戒警報では、「国民のゆるみかけた心にねちを掛け、緊張さし、良い結果となつた」（四四・六・一七）と竹鼻は感じたが、同年七月のサイパン島陥落以降、警戒警報、空襲警報が頻繁に鳴るようになり、緊張状態がだんだんと常態化していった。

大阪で本格的な空襲がはじまるのは、四五年三月のことである。一三日の第一次大阪大空襲は、市内一三〇ヶ所で一三万四四三六戸にのぼる家屋と工場が罹災し、死者は三九六八人、被災者は五一大弾来れば消火と待ちかまへ」ながら待避壕で何とかやり過ごした（四五・三・一四）。

このように大規模な空襲が実際にはじまる段階になると、近隣の主婦の間で「日本は負けるのではないか?」という噂が立つようになる（四五・四・四、以下同）。竹鼻は「日本は絶対に負けない。必ず勝つ。又今度の戦争は降伏はない。勝つか? 死か、最後まで戦つのだ」と妻に話し、自らの覚悟を示した。しかし、実際には竹鼻自身も「これで戦争に勝てるのか?」という疑問を日記に書き込んでいる。それは、空襲が激しくなってきたからというよりは、既存の戦争指導体制のあり方からくる疑問であった。竹鼻は、同じ日の日記に次のように書いている。

指導的立場にある人、上に立つ人の役得を乱用し、罪を国民に押しつけんとする態度は、敵の求むる、軍、官、民の離間を助

けるのみである。閣下が自宅疎開家居の為、職場の役得を利用し、我々釘一本持出しても叱られる重要な資材と猫の手も欲しい今、工員を私用に使つて〇〇に今日すでに一週間余り。其の為仕事に差支へて居る。〔中略〕必達週間、欠勤防止の説教も、この事實を知ることに依り如何なる氣持が我々の心に起るだろうか? 軍なるが故に、軍工場なるが故自分は悲しむ。戦争に勝つべき、第一線の兵士に申訳ない。果してこれで戦争に勝てるか? 閣下の反省を求める。

空襲が激しくなり、今こそ国民の覚悟と決心が求められる状況下において、指導的立場にある人物（大阪陸軍造兵廠の高等官⁽²⁾）が、役得を利用して人と資材を使い、自宅の疎開を行っているのは戦争遂行上あまりにも嘆かわしいことと竹鼻の目には映ったのであった。「我々」がたつた五個の衣料疎開の荷物を駅まで運ぶのに相当な苦労をしているにも関わらず、高等官は「星のついた自動車を私用で白昼堂々と移転に使って」いる。こうすることをする人びとによって戦争が指導されているかと思うと、竹鼻は「淋し」く感じた。「前線の将兵のうるわしい、部隊長以下一兵に到るまで結ばれた、あの戦友愛」こそ自分の職場にほしいと竹鼻は願った。激しい空襲がはじまっている今、そういう「戦友愛」がなく、上司たちが私利私欲に走る生産現場の現状を見れば、「戦争に勝てるのか?」と疑問に思うのは竹鼻にとって論理的必然であった。

しかしながら、六月以降の度重なる大空襲は、こうした竹鼻の願

いの存立する余地を次々と狭めていくことになる。大阪府は、六月には計五回の空襲を受け、七月には計一七回の空襲で甚大な被害を受けた⁽³⁵⁾。竹鼻はそれでも、「御國の為なら、職場を守り抜く為なら喜んで生命を捧げる決心である」(四五・六・一五)と書き、「職場にて死すも悔いぬ我が生命、戦のには散るも変らじ」(四五・八・五)と詠んで、最後まで自分を奮い立たせようとした。

しかし、八月一四日の最後の大坂大空襲は、職場である大阪陸軍造兵廠を完全に破壊し、竹鼻は「決戦」の場そのものを失うこととなる。「聖戦」を信じ、総力戦体制の完全を求めるがゆえに抑えがたかった竹鼻の「指導者」批判は、空襲という戦争の最終段階にあつていよいよその鋭さを強めたが、敗戦という事態は、その前提である戦時体制そのものを途絶させたのであった。

おわりに

最後に、以上見てきたような『徴用日記』から読み取れる竹鼻信三の意識動向の特徴をまとめ、そこから国民徴用制度の全体像、ひいては戦時期日本の国民統合の実像を把握するための一つの視座を提示したい。

(1) 竹鼻の意識動向の特徴

『徴用日記』を通読するかぎり、竹鼻は基本的には国家の喧伝す

る論理で日本の戦争の意義を理解し、戦中を通して「決戦」のために自らの身を捧げる気持ちを持ちつづけた。また、クリスチャンとして、いかなる苦難のなかにあっても日々の生活に感謝して生きようとする自己規律化の志向を内面化していた。『徴用日記』のなかではこうした二つの志向性が日々竹鼻自身に内省をもたらし、支配秩序からの逸脱を抑制する役割を果たしていた。日記を書くという行為それ自身も、竹鼻にとっては自らを内省の方向に導くという意味をもたらしていたと思われる。

しかしその一方で、竹鼻は非能率的で無駄の多い生産現場のあり方に苛立ち、これを一貫して批判しつづけた。一九四三年頃まではそれは生産現場にとどまるものであったが、戦局も押し迫った四四年以降になると、食糧・物資の不公正な配分や「特権階級」の「遊興」「指導者」の「役得」といったように、その批判の幅は広がっていった。こうした意識の背景には、跛行的に進行する戦時経済の崩壊が横たわっているのはもちろんだが、今まさに「祖国」が決戦下にあるという「決戦」意識と、自らが商人の身分を捨てて国家のために身を捧げた徴用工=「産業戦士」であるという自覚とが強く働いていた。そのように国家との関わりを基盤にして現実が評価されるため、竹鼻の現状批判は「決戦生活」や「御國の為」といったたぐいの「聖戦」を支える支配イデオロギーの徹底という外觀をとつて現れたが、工員の待遇改善や徴用工の扱い方の改善など、それはまぎれもなく現在の秩序を搖るがす志向性を内包するものであった。

このように、竹鼻の有していたいくつかの志向は、それぞれ対立し、矛盾しあいながら日記に現れているが、全体として既存の秩序を“改善せねばならない”という強い衝動を示していることは間違いない。したがって、こうした衝動に対しても徴用制度の再編（援護事業の拡大）といった一定の改革の方向づけが与えられたとき、竹鼻はそうした政策と共に鳴り、かつ現実においてはその不徹底を批判した。国民徴用援護会による補給金の支給について、竹鼻ははじめこそ「政府の恵み」と感謝したが、後にその不公平なあり方を批判するに至っている（四四・一・二六）。こうした意識動向こそがまさに徴用制度をそのままにしておかず、その再編を絶えず要求する社会的契機につながっていったのである。

(2) 竹鼻の経験の社会的位置

では、こうした竹鼻の意識動向は、当該社会において、はたしていかなる位置にあったのか。本稿で見てきたように、竹鼻は大阪陸軍造兵廠という陸軍の支配下の職場に勤め、しかも事務職として働いた。その意味では、竹鼻の徴用経験は、民間工場や肉体労働の現場を生きた徴用工のそれとは相応に異なるものであったことは間違いない。また、クリスチャンであることも当該期にあっては特殊な立場であつただろう。これに対し、彼が元呉服問屋の従業員であつたことや、⁽²²⁾「祖国」の勝利を信じてやまない戦意の高い人物であつたことなどは、ある程度的一般性を有するものであった。竹鼻の意

識動向が彼自身のこうした徴用工内部での位置によって規定されることは間違いない。

しかし他方で、既存の秩序に対する竹鼻の批判が、まさに自身が徴用された身分であるということをテコにして起こっていること、自らがその立場に徹しようとしていくほど物資の配分の不公正や「指導者」の役得に対する批判が強くなっていることを考へるなら、徴用という一般的経験そのもののなかに、彼をして既存の秩序の批判へと突き動かす重大な契機がはらまれていたと見るべきであろう。こうした契機はたとえば、「徴用工員の大部分が徴用は軍人の応召に匹敵するものとして、名誉感と共に緊張して応徵せるに事業主の態度が依然として利益追求第一主義」であるとする官憲の観測や、「徴用は進んで行くが、經營は依然として以前の經營状態が続いてをります。之が非常に食ひ違ふのです」といった労務管理担当者の発言⁽²³⁾に現れた、民間軍需工場の徴用工の意識動向にも認められるものである。応召に準ずる「名誉」であり、国家的な立場であるはずの「徴用」と、戦時経済の中で混乱する生産現場の実態とがあまりにもかけ離れているという構図は、広く社会のなかに浸透していくのであり、こうしたギャップの間に現状批判への衝動がうまれる素地があった。

このように、当該社会においては徴用されるということにすでに支配秩序への批判の衝動が埋め込まれているということができるのであり、そこに徴用された人びとに共通するであろう志向の一般的

傾向性を読み取ることができる。こうした、〈増産〉を支えつつも、揺るがす徴用経験のあり方こそが徴用制度の展開を方向づけ、国民統合の展開を規定する一つの大きな契機となつたといえるのであり、こうした経験の態様を組み込むかたちで戦時社会の展開は論じられる必要があるう。

(付記) 資料の閲覧にあたり、大阪国際平和センター(ピースおおさか)の常本一氏に大変お世話になった。記して謝意にか

えたい。

注

- (1) 加藤佑治「日本帝国主義下の労働政策」(御茶の水書房、一九七〇年)など。
- (2) 抽稿「徴用制度像の再検討」(『人民の歴史学』一六五、一〇〇五年)、同「徴用制度下の労資関係問題」(『大原社会問題研究所雑誌』五六八、一〇〇六年)、同「戦時期日本における国民徴用援護事業の展開過程」(『歴史学研究』八三五、一〇〇七年)など。
- (3) このような態度は戦時下の日本社会では「くありふれたものであった。多くの研究が指摘するように、戦時体制に対する自覺的な抵抗はほとんど現れず、厭戦感情が広がったとしてもそれは即目的なものにとどまっていた(広川道秀「降伏時の国民意識」(『人文研究』三九一一、一九八七年)、同「国民の敗戦体験」(藤原彰ほか編『十五年戦争史』四、青木書店、一九八九年)、川島高峰「銃後」(読売新聞社、一九九七年)など)。
- (4) 藤原彰編「日本民衆の歴史9」(二者堂、一九七五年)、一〇八、一〇九頁。ほかに、法政大学大原社会問題研究所『太平洋戦争下の労働運動』

(東洋経済新報社、一九六五年)や栗屋憲太郎「国民動員と抵抗」(『岩波講座日本歴史』二一、近代八、岩波書店、一九七七年)など、同様の見地に立った研究は多い。

(5) 久保在久「発刊を祝して」(竹尾信三「徴用日記 戦前戦後の思い出」タケハナ株式会社、一九八七年※以下「刊行版」と略す)、五頁。以下、竹尾のプロフィールについては「戦中戦後の思い出(自己紹介もかねて)」(刊行版所収)を参照。

- (6) 労働運動史料委員会編『日本労働運動史料』(一〇)、労働運動史料刊行委員会、一九五九年)、一一〇、一一一頁、表II-62、参照。
- (7) 抽稿(一〇〇六年)。
- (8) 以下、「徴用日記」の出典については、(年・月・日)といったように示す。
- (9) 久保「発刊を祝して」五頁。
- (10) 大阪砲兵工廠慰靈祭世話人会編『大阪砲兵工廠の八月十四日―歴史と大空襲』(東方出版、一九八三年)、二二四頁。
- (11) 『毎日新聞』一九八三年九月二一日付記事「歴史の空白 いま明るみに」(吉川弘文館、一〇〇九年)、一六、一七頁。
- (12) 西川祐子『日記をつづるという』と――国民教育装置とその逸脱』(吉川弘文館、一〇〇九年)、一六、一七頁。
- (13) 酒井一「砲兵工廠と大阪産業」(大阪砲兵工廠慰靈祭世話人会前掲書)、一二四頁。
- (14) 「大阪陸軍造兵廠ノ現況」(一九四五年九月二二日)一(久保在久編『大阪砲兵工廠資料集』上、日本経済評論社、一九八七年)、一〇、一一頁。
- (15) 大阪陸軍造兵廠「徴用工員の教育及使用法に就て」(陸軍兵器行政本部『造兵渠報』一二一、一九四四年一月)、参照。
- (16) 抽稿(一〇〇五年)、一八〇三頁。
- (17) 抽稿(一〇〇七年)、二、四頁。
- (18) 管見のかぎり從前の雇用先から補給金を出さねばならないとする法的な規定は存在しないので、この補給金は呉服問屋の任意によるものと思われる。

立国会図書館所蔵、三七頁。

- (19) 労働運動史料委員会『日本労働運動史料』(九、東京大学出版会、一九六五年)、四一〇頁。
- (20) 「こうしたところの方は、町工場の職人たちの間においても見られた」(有馬学『帝国の昭和』講談社、一九〇〇年、三六三～三六四頁)。有馬氏のいう「何をこう作ったかが金になるのではなく、〈時間で賃金を得る〉ことを当然とする意識」は、軍需生産に動員された多くの人々にとって、はじめて触れた新しい世界観に他ならなかつた。
- (21) 大阪府公文書館所蔵『昭和十八年通常大阪府会予算決算審査委員会速記録』、一九三二頁。
- (22) 古澤健『徵用工の断想』(『東洋経済新報』一一三六、一九四四年八月一九〇)。
- (23) 一国民徵用制度改革の必要』(『東洋経済新報』一一三八、一九四四年九月一〇)。
- (24) 「刊行版」一二二五～一二二六頁。
- (25) 法政大学大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働者状態』(東洋経済新報社、一九六四年)、一三四～一四一頁。
- (26) 日本の空襲編纂委員会編『日本の空襲』(六近畿、三省堂一九八〇年)、一一一～一〇〇頁。
- (27) 高等官士、大阪陸軍造兵廠の職員のなかでも最上級の位で、武官、理事官、技師、教授といった職種から構成されていた(三宅宏司『大阪砲兵工廠の研究』思文閣出版、一九九三年、四〇四頁)。竹鼻が批判している人物がどの職種にあたるのかは、不明。
- (28) 日本の空襲編纂委員会前掲書、六七頁。
- (29) 動員の対象者として中小商工業の転廻業者が多かつたことは、日本の戦時労働力動員の大きな特徴であった(西成田豊『近代日本労働史——労働力編成の論理と実証』有斐閣、一九七七年、三〇四頁)。
- (30) 内務省警保局『昭和十七年に於ける社会運動の状況』四三九頁。
- (31) 德田健児編『労働問題懇談会速記録 第二回』(一九四三年五月印刷、国